

ぼくの信長君

いわお俊志

ぼくの 信長君

プロローグ

天正十年（1582）六月二日。織田信長は、秀吉に中国侵攻を命じ、自らも京都の本能寺を宿舎として滞在していた。前年、甲州の名門である武田氏を滅亡に追い込んだ織田勢は、今や天下統一に向けて向かうところ敵なしの状況であった。

中国地方に長年の間君臨（くんりん）する毛利家さえ滅ぼしてしまえば、天下統一の大事業はヤマを越える。信長は、一度見かけたことのある毛利輝元（てるもと）の、のつぺりとした間抜け面（づら）を思い出していた。

じいさんは偉かったらしいが、本人は蹴鞠（けまり）だけが得意の「たわけ」だ。あんな阿呆（あほう）が、のさばってきたから、これまで天下の人民が苦しんできたのだ。

信長にとって、生まれつきがいいというだけで、のほほんとしてきた連中は、すべて敵だった。その毛利輝元を、百姓上がりの秀吉が、もう一步のところまで追い詰めている。貴族顔をした輝元が、猿顔の秀吉の前にかしこまって平伏しているところを想像すると、それだけで信長の頬がゆるんできた。

さてと、
中国がそれで一段落すれば、次はどこだ？ 関東か？ 九州か？ 信長は寝所に下がっても、あれこれと天下布武（ふぶ）の方策を考えていた。

天下布武！
これこそ、信長がこの世に生まれてきた意味だった。武力によって、この乱れきった世の中を統一するのだ！

信長は、持っていた扇子をぱちんぱちんと音をさせながら、広げては閉じ、広げては閉じ、している。こういつ時のくせで、虚空の一点を見つめてはいるが、頭の中はめまぐるしく回転していた。

その時である。本殿に通じる廊下のほうから、あわたたしい足音と怒声が

ひびいてきた。

「殿！ 殿！ お起きください」

「曲者（くせもの）でござる！ 曲者でござる！」

右からも左からも、人びとが走り回る足音が聞こえてくる。

信長は、はね起きて長押（なげし）にかかっている槍をつかんだ。

側近の森蘭丸が、大刀を手づかみにして部屋に駆け込むや、そのまま半ひざを立てて報告した。

「光秀殿、謀叛（むほん）にござります。」

「むづ、光秀か！」

蘭丸のことばに、信長は天を仰いだ。これが、関東の北条や、武田の残党の襲撃なら大したことはない。おそらくは少人数で、私怨（しえん）を晴らすためだけのものであろう。

しかし、光秀は信長の側近中の側近である。その謀叛（むほん）となると、これは容易ならぬことだ。場合によると毛利や足利將軍とも手を結び信長を亡（な）き者にしようとしているのである。

「梵天（ぼんてん）を、呼べ」

信長は短く言い放った。

村山梵天。ここ数年、影のごとく信長に付き従ってきた怪僧である。陰陽道（おんみやうどう）（おんみやうどうづ）や真言密教をはじめとするあらゆる呪術（じゆじゆづ）に通じていた。神や仏など、一切信じない信長であったが、この男の説く靈魂の不滅（ふめつ）だけには、なぜか心ひかれるものがあった。

「人間、死ねばどうなる？」

信長は、梵天とひまさえあれば繰り返した問答を思い出していた。

「されば、でござる。御靈（みたま）は死なないのでござります。」

「では、どうなる？」

「次の世に、ちよつとよい体を見つけて、そこに乗り移るのじやござります。」

「ほう。それで、どうなる？」

「この世でやり残したことを、そこでまたやりとげるのでござります」

「それは、どれくらい後のことじゃ？」

「さ、それは、何年の後か、何十年の後のことかは、分かりませぬ。何百年もかかることも、ござりまじょう」

「何百年？ 余はそんなに、待てんぞー！」

がしっ、がしっ、きいーん。

あちこちから、刀と刀がぶつかりあつ物音がし始めた。最初は遠くの方に聞こえていたその物音が、しだいしだいに、信長の寢所（しんじょ）に迫ってくる。敵は、やはり相当の軍勢のようであった。信長は持っていた槍（やり）を振って、先端のさやを落とすと、そのまま寢所から庭に通じる回り廊下へのふすまを開けた。

「！・・・」

薄明かりの中を、たいまつを持った軍勢が、次から次へと押し寄せてきている。警護の者が、必死になって西門から、庭口への侵入を防ごうと防戦しているが、多勢に無勢なのは明らかだった。警護の者の手を逃れた雑兵（ぞうひょう）が、一人、二人と、信長の寢所となっている本殿へと、駆け上ってきた。

「むっ」

信長は、言い放ち、そのうちの一人の胸を槍で刺した。その雑兵が、もんどりうって廊下から庭へと転げ落ちた。信長は、その槍を引き抜きざま、今度は、右手から駆け寄ってきた雑兵ののどを目がけて、槍を突き出した。

「ひゅっ」

雑兵は、声にもならないかすかな空気の振動を残したまま、あおのけになって廊下に倒れた。信長はそれを目の端でとらえるや、もう一度寢所に戻った。梵天が、大刀を横にして待機していた。手には、数珠（じゆず）を握っている。

「どつやら、その時が来たようだ」

信長が、顔色も変えずに言った。梵天は黙ってうなずくと、持っていた数珠を寝所のたたみの上に置いた。

「火をつける」

信長のことばに、梵天は部屋の四方八方に、火を放った。あつという間に、火が燃え上がり始めた。

「この世は常の住み家にあらず・・・」

信長が、日ごろから好んでいる「敦盛（あつもり）」の一節を、吟じ始めた。いつのまにか、扇子を広げ、舞（まい）を舞い始めている。

「人間五十年 下天（げてん）のうちをくらぶれば

夢まぼろしのごとくなり・・・」

すばやい軽やかな足取りは、何気ないものに見えるが、見るものが見れば芸の達人の域に達していた。信長は、邪念を振り払うかのように、この世で最後の舞を舞った。

「いいか。手はずどおりにするのだぞ」

舞い終わった信長は、扇子を放り投げて手短かに言ったかと思うと、先ほど梵天がたたみの上に置いた数珠の前に座り込み、ものすごい形相でその数珠をにらんだ。そして数珠をにらんだまま、寝着（ねぎ）の前をはだけ、横にあった小刀（しょうとう）をつかみ、あつと言つ間もなく自らの腹に突き刺した。

「ごめん」

次の瞬間には、梵天の大刀が半円を描き、信長の首をはね落としていた。

それから梵天は、急いで信長の首を小脇に抱え、部屋の反対側に行くと、燃え盛っている火の中に首を投じた。
じゅじゅつ。

顔の肉が焼けるいやな匂いがし始めた。

これでいい。これで、この首が信長のものであることは、誰にも分からない。

それどころか、信長が死んだことさえ当分の間、誰にも分からないだろう。それが、梵天の狙いだっただ。

火はもう部屋中に燃え移っている。

梵天は、急いで数珠を拾い上げ、その中の一番大きな琥珀（こはく）の玉に目をこらした。ふつつの者の目には、ただの琥珀としか映らないだろうが、梵天のような霊視が出来る者にとっては違う。

琥珀の中に、ものすごい表情をした顔が浮かんでいた。かつと目を見開いた、すさまじいまでの信長の、最期の形相（ぎょうそう）だった。

「おれは、死なんぞ。すぐにまた、この地上に戻ってくるぞ。」
信長の、声にならない声が聞こえるようだった。

「どうやら「魂移（たまうつ）し」の術は成功したようだ。後は、信長の魂魄（こんぱく）の乗り移ったこの琥珀の玉を、生まれてきたばかりの赤子に飲ませればよい。なるべくなら信長の血筋の者が、そんでなければ忠実な家臣筋の者がよかつた。その子が、元服を迎えるころには、信長としての記憶がよみがえるだろう。そうして、志（こころざし）半ばにして倒れた信長の天下布武の計略を、その子が受け継ぐ。新たな信長の誕生だ。いや、その子は信長そのものだから、再来と呼ぶべきか？ まあ、どちらでもいい。わずか十数年で信長がこの世に復活することに変わりはない。」

それが、万が一の事態に備えて、信長と梵天が、考えに考え抜いた秘策だった。人間、一寸先は闇だ。天才である信長は、そのことを知り抜いていた。その不測の事態が、予想外に早く来たに過ぎない……。梵天は、すばやく数珠をふところにしまいこみ、部屋を出て庭先に飛び降りた。

梵天の人影を認めて、明智の手の者が二人、三人こちらへと駆け寄ってくる。しかし梵天に、雑兵相手に切り結んでいるひまなどは、なかった。今は、一刻も早く遠くへ逃げ失せることだ。



梵天は足早に庭を突っ切り、植え込みから、塀の上へよじ登り、京の大通りへと身をおどらせた。南側に目をやると、そこには予想どおり、続々と詰めかけた明智の軍勢が門を固めていた。梵天は必死の思いで、北側に目をこらした。北の方からは、こちらへ駆け寄ってくる手勢がいた。妙覚寺に陣していた織田信忠の手のものに間違いなかった。

「謀叛でござる。明智殿の謀叛でござる」

梵天は、その手勢に向かって大声を出しながら、走った。

「分かった。ついて来い。」

信忠の手の者が、梵天に喚（おめ）き返した。今は一人でも味方が多い方がいい。梵天と一緒に本能寺へ引き返せという意味だった。だが、梵天にはそれよりは、大事な使命があった。しかし、それを説明しても分かってはもらえない。梵天は、「ごめん」と言いざま、駆け続けようとした。

「おのれ、逃げるか！ 裏切りものめ！」

信忠の手の者が、やにわに大刀を抜き放ち、駆け抜けようとする梵天を、後ろから斬りつけた。

「違う。違うのだ……」

梵天の上半が前のめりに泳いだ。それと同時に、ふところの数珠が大路にばらばらと散らばった。

「あつ、殿が！ 殿が！」

梵天は、血走った目で数珠を追った。

「まだ、言うか。この曲者（くせもの）め！」

もう一人が今度は槍で、梵天を後ろから突いた。梵天は、必死で数珠に手を伸ばそうとしたが、むだだった。梵天の目の前が暗くなった。

数日後。戦乱の治まった京の大路で、鈍く光る丸い玉を見つけた童女がいた。

「あら、きれい」

童女は、その玉を拾い上げてしばらく眺めていたが、やがて気に入ったのだろう、たもとにそっと入れて、足早にそこを立ち去った。

1

横川中学1年3組の生徒は、全員身じろぎもせず席についていた。

「こらあ、お前ら！」

「ばあん、と机をバツトで叩きながら、2年の奥出（おくで）健介（けんすけ）が、大声を張り上げている。

「いいか、これから、身体検査をする。金を持つてるものは、先に出せ。

そうでないものは、金が見つかるまで服を脱いでいくんだ。いいか！

分かったか？」

「ばあん！」

奥出がもう一度机を思いつき叩いてから、全員を見回した。

「ほら、お前からだ。」

奥出が、一番前の列にいた小柄な佐藤まさるの方に、あごをしゃくった。

佐藤まさるが、震えながら、持っていた金を奥出に差し出した。

「よし、帰ってよし」

奥出が金をポケットに入れると、佐藤を解放した。

これが横川中学に昔から伝わる悪習だった。上級生が、こうして何だかんだと理由を見つけて、下級生を「しめ」あげる。それに反抗するものは、後でもっとひどい目にあわされる。そのことは、みんなこの中学に入学するまでに、いやというほど聞かされていた。先生たちでさえ、手を出せないということだった。

「つぎー」

奥出が山根あきひこを見た。

山根は、この前の選挙で委員長に選ばれていた。山根と同じ小学校だった同級生は、誰もが山根に一目（いちもく）置いていた。正義感の強い優等生だということだった。

「いや、ぼく、お金なんか持ってません。」

山根は立ち上がって答えた。

「じゃあ、しょうがないな。どこかに隠してあるんだろう。まず、そのズボンを脱げ」

奥出が、バットをくるくる振り回しながら言った。あさ黒いにきび面に、蛇のような陰険（いんけん）な目が光っている。

「そ、そんなことできません」

山根が言った。そのことばに、奥出の横にいたがっちりした体格の二人の二年生が、すばやく山根の左右に回り込んだ。そうして山根の腕をがっしりと抱えこんだ。

「な、何をするんですか。やめてください」

山根は手足をばたつかせ、必死になって抵抗したが、相手は上級生で、しかも二人だ。とてもかなうものではなかった。

奥出が山根の前に回りこんで、ズボンのベルトを外しにかかった。

「やめ、やめてください。やめてくださいー！」

山根が、さらに足をばたつかせて、懸命に声を張り上げた。

「思い出したか？ 金がどこにあるか思い出したか？」

奥出が、にきび面をにやつかせながらも一度聞いた。エナメル製のベルトが外され、奥出の手が山根のスボンをおろしにかかっている。

「思い出しました。思い出しました。だから、もうやめてください。」

山根が泣き声をあげた。奥出たちが、ようやく山根を解放した。

山根は、机に突っ伏して、ひくっひくっ、しゃくりあげている。

クラスの他の者たちは、あまりのことに声も出なかった。

「へっ、最初からすなおに、金を出してりゃいいんだよ」

奥出が山根の差し出した金をポケットに入れながら、捨てゼリフを吐いた。

「次、お前だ」

奥出が、前から三番目に座っていた男の子を、バットでこづいた。

その生徒は、さつきからこの騒動にまるで何の関心もないかのように、何かの本を読みふけていた。そして奥出の挑発で初めて教室内の異変に気づいたようだった。

「ほら、お前だ。さつさと金を出すんだ。それともお前も、身体検査を受けたいのか？ あーん」

奥出が、もう一度その生徒をバットでこづこうとした。だが、その時には、もうその男の子は、ほっそりしたきゃしゃな体をすつくど立ち上がらせていた。その男の子の涼やかな黒目が奥出のにきび面と正面からぶつかった。

「……」

その男の子の、女の子と見まがうような美貌に、奥出が一瞬たじろいだようだった。やがて、その生徒は、帽子をかぶると、すたすたと教室の戸口の方に向かった。

「こ、こら、お前。何をするー！」

奥出は、その1年生の思わぬ行動に不意をつかれて、あわてたようだった。



その男の子は、不思議そうに奥出の方を見た。

「？ 見りや分かるだろう。帰る時間だ」

奥出のにきび面が怒りでどす黒くなった。

「な、なにー？ なめてんのか、てめえ」

奥出がバットを放り出し、その生徒の首根っこをつかもうとした。

だがその時には、奥出の手が逆向きにねじられ、体全体が一回転させられていた。そして次の瞬間には、ぱっしーんと音を立てて、床に叩きつけられていた。

「やろっ！」

他の2年生が、左右からその生徒にとびかかった。だが、その生徒はくるつと振り返ったかと思うと、二人の手首をつかみながら、器用に二人の間をすり抜けた。二人はあつと言う間もなく、半回転させられて、お互いの顔と顔をぶつけ合って床に転がされていた。

その男の子は、その三人の方に、目もくれずにすたすたと、歩き去った。

「.....」

ワルの三人組は、何が起こったかわけがわからずに、しばらく座り込んだまま、その生徒の後ろ姿をぼかんと見送っていた。

「あれ、誰だっけ？」

クラスの誰かが、ささやくように隣りの生徒に聞いていた。

「たしか、北小路（きたこうじ）とか言ったよ。北小路信長」
聞かれた方が答えた。

そうだった。北小路信長。たしかにそんな名前だった。

西江浩一は、その時代がかった名前を、今思い出していた。信長は、日ごろは誰と仲がいいわけでもなく、まったく目立たない生徒だった。それが、ここまであざやかに上級生を叩きのめす力を持っているとは、誰も想像だにしなかっただろう。今日は信長のおかげで、助かったようなものだ。浩一は内心ほっとしながら、そう思った。だが、面子（めんつ）を丸つぶれにされて、上級生が黙っているはずがない。明日からどうなるのだろうか。そうなると同じクラスのほくらもただではすまない。浩一はどきどきしながら、そう思った。

だが、待てよ。上級生相手にあれだけのことをするぐらいだ。信長はよっぽど腕に自信があるのだろう。たとえば空手道場か何かに小さいころから通っていて、あのくらいの相手なら簡単に倒すことができるとか・・・。

そうだ！ そういうことに違いない！ それに、そういう道場には屈強な先輩たちもごろごろいる。いざとなれば、そういう連中もいつでも応援に駆けつける段取りが出来ているのに違いない！ これは、すごい味方が出来たぞ。これなら、もう上級生どもの言いなりになる必要はない。

浩一は、そこまで考えるとやっと少しほっとした。そして、こっそり教室を抜け出すと、信長の後を急いで追いかけた。

「ちょっと待ってくれよ、信長君。」

浩一は、やっとの思いで信長に追いつくと、息をととのえながら、そう言っ

た。信長は、返事をするでもなく、しないでもなく、何の関心もなさそうな目で浩一をちらりと見たかと思うと、そのまま歩き続けていた。

「さっきの技、すごかったね。あれは空手かい？ それとも柔道か何かなの？」

「さっきの技？ ああ、あれか？ いや、違う」

信長は、そっけなく言った。

「でも、まさか。信長君、子供のころから何か武道を習ってるんだろ？」

「いや、そんなの習ったこともない」

浩一は、信じられない思いで信長を見た。

「どうして、そんなこと聞くんだけ？」

「いや、どうしてかって・・・」

浩一は、とっさにいい考えを思いついた。

「もしよかったら、僕もそれを習おうかと思って」

「ああ、そういうことか」

信長は、やっと納得がいったようだった。

「そういうことなら、ほら、ここだ。こここの2階がレッスン場だ」

信長が、立ち止まって、ビルの2階を指差した。

浩一は、そこに目をやった。

「毎日入会受付中。エレガンス・ダンス教室」

2階の窓ガラスには、大きくそう書いてあった。

「あああ、信長ちゃん。遅かったわね。みんな待ってるわよ」

階段のところから、けたたましい声がした。薄いピンクのイブニングドレスに身を包んだ中年の女性が、満面に笑みを浮かべて、顔をのぞかせていた。

「あああ、こちら、お友達？ あなたも、ダンスを習いたいの？」

「いや、ぼくは・・・」

浩一は口ごもった。

「ちょっと、見学に來ただけです」

「いいわよ、いいわよ。さ、上がって、上がって」

そのピンク色の女性にうながされて、浩一も2階のレッスン場上がった。七、八人のグループが、いつせいにこっちを見た。全員、女性だった。みんな色とりどりのイブニングドレスを着ていた。パープル、目の覚めるようなシヨッキングブルー、水色。それにスパンコールシルバー。むっとするような香水のおいがフロア中に立ち込めていた。

「さ、時間がもったいないわ。さっそくレッスンを始めましょう」

ピンクの女性が、手を叩いて、レッスンが始まった。

ジルバ、タンゴ、フラメンコ。信長は曲が変わるごとに、それぞれの女性のダンスパートナーをとめた。時には一人や二人の相手をすることもあった。

「ねえ、信長ちゃん。今度は私とサリダステップの練習、してくれない？」

「その後は、私とクイックターンのおさらい、お願いね」

つぎつぎに女性陣の黄色い声がかかった。何しろ男性は、たった一人だ。みんな信長のファンのようにだった。

なるほど、彼女らなら、信長に何かあったら、応援に駆けつけてくれるかもしれない。浩一は、そう思った。

だが、この女性軍団は「屈強」と言うのには、ほど遠かった。

2

次の日。西江浩一は、授業中に信長の様子をそれとなく観察していた。

信長は、授業を聞くでもなく聞かぬでもなく、二本の指を頭にあてて、何事かを考えているようだった。

「はい、北小路君。2マイナス5はいくらですか？」

数学の女の先生が、信長を当てた。信長は、相変わらず、とんとんと二本の指で頭を叩きながら、考えごとをしている。

「北小路君。聞いてなかったの？ 返事ぐらいしなさい！」

女の先生がヒステリックに声をあげた。信長は、それでようやく自分が当てられたことに、気づいたようだった。

「もう一度言うわよ。2マイナス5はいくらですか?」

「うん? 小さい数から大きい数は引けないと、習ったぞ」
クラスのみんながどつと笑った。

馬鹿にされたと思った女の先生が、金切り声をあげた。

「それは、小学校の時の話でしょ。ここは中学校なのよ。この前から何度も説明してるでしょ。何を聞いているの?」

先生の顔が怒りで震えている。

「もう一度、言うわよ。2マイナス5は、いくらになるの?」

浩一は、こっそり信長にささやいた。

「マイナス3だよ。マイナス3って言えば、いいんだよ。」

「あつ、そうか」

信長は、先生の方に向き直った。

「マイナス3だ。マイナス3って言えば、いいそつだ」

クラスの者が、また全員どつと笑った。先生が唇をわなわな震わせている。

「北小路君、あなた・・・」

その時だった。教室の戸ががらつと開いて、柄の悪い上級生が4、5人、どかどかと教室に入ってきた。

「北小路信長って、いるか?」

ひときわでかい、凶悪そうな顔をした上級生が、そつ言つて教室中をにらみまわした。

その声に、教室中が凍りついたようにしんとした。

3年の総番長、地崎(ちざき)たけるだった。後ろに、にきび面の奥出を従えている。見ると、奥出の顔が、まぶたから頬(ほお)にかけて紫色にはれあがっていた。昨日の失態(しつたい)で、3年にこつぴどくやられたのに違いなかった。

「ちょっと、あなたたち、何をするの！ 授業中なのよ」

女の先生が、黄色い声を張り上げた。

「うっせい。ばばあは、引っ込んでろ」

地崎の一喝（いつかつ）に、その女の先生が声を失って、立ちすくんだ。恐怖とショックで足が小刻みに震えているのが見えた。

地崎の父親は、本物のやくざ者だという話だった。それで、先生たちも怖くてこのグループに手を出せないというのが、もっぱらの評判だった。

「もう一度言っぞ。北小路信長は、いったいどいつだ？」

「何か用か？」

その時になって、はじめて自分のことを言われていることを気づいたのか、信長が、かん高い声を出して顔を上げた。

地崎たけるは、信長の色白の顔を見て、拍子抜けしたようだった。まじまじと信長の整った顔をながめている。

「何だ。こいつか。お前、こんな女みたいな野郎に、やられたのか？」

地崎が奥出の方を振り返った。奥出がおずおすと、うなずいた。昨日は威張りくさっていた奥出が、地崎の隣にいと、まるで虎の走り使いをやらされているねずみのように見えた。

「何やってるんだ。だから下級生なんかになめられるんだ」

地崎がこぶしを固め、思いつき奥出の頭を殴った。

「おう、お前。ちょっと外に出てもらおうか」

地崎が信長の方にあごをしゃくり、どすをきかせた声で言った。

「分かった」

信長が、何のためらいもなく立ち上がって、地崎たちの方に向かった。そして、地崎たちの横をすり抜けてそのまま教室の外の廊下に出たかと思うと、あっという間に駆け出した。

「あっ、こ、こら。待てー！」

「待ちやがれー」

不意をつかれた地崎たちが怒声をあげながら、あわてて信長の後を追いか

た。

どたどたどた。

彼らが廊下を走りぬける足音が、廊下中に響きわたった。

信長が、スピードを上げた。それに合わせて地崎たちもスピードを上げて追いかけ始めた。次の瞬間、信長が大きく前にジャンプした。そして空中で体を器用にひねって半回転させ、一方の足をさっと廊下に差し出しながら、腰を沈めて着地した。

「コサックダンスだ！ 浩一は昨日のダンス教室での信長のあざやかな踊りを思い出していた。ずただだーん。」

地崎たちがもろにその足に引つかかって、束になって前方に倒れこんだ。廊下にはいやというほど鼻や顔をぶつけたようだった。勢い余ってさらに向こうの壁にぶつかるものもいた。

「あ、あいたた」

「あいたた、あつう」

ぶざまに倒れこんだ連中のうめき声が、あつちこつちで聞こえた。

「このやるう！ 早くどけよー！」

しばらくして、地崎が、不機嫌そうに、上に乗っている奥出たちを毒づいた。

「てめえ、信長。おれを本気で怒らせやがったな。」

そう言って地崎が、信長の方に向き直った。ポケットから大型のサバイバルナイフを取り出しそれを信長の方に向けながらゆっくり立ち上がった。サバイバルナイフのぎざぎざの刻み目のついた背が、不気味に光っていた。「殺してやる。絶対にお前を殺してやる。」

地崎は、そう言いながら信長の方にじりじり詰め寄り始めた。

その時だった。信長は、自分の学生服のボタンをとっさにちぎると、それをとんりの教室の窓ガラスに向かって、ひゅんと投げつけた。かんかんかん、かーん。

金製のボタンが窓ガラスに当たりながら、鋭い連続音を立てながら飛んでいった。その音が廊下中にこだました。その音に他のクラスの生徒や先生たちが、窓や戸を開け、何事かといっせいに顔をのぞかせた。

1組、2組。そして4組、5組。

今や1年のすべての生徒が、廊下で起こっている光景を目にしていた。みんなはすぐに何が起きているのか分かったようだった。そして、息をひそめて、ふたりの対決がどうなるのかを見守っていた。下手をしたら、信長が殺されるかもしれない。誰も口にこそ出さなかったが、そんな恐怖と緊張が校舎中に広がった。

その中を信長は、涼しい顔をして地崎と向き合っていた。地崎はサバイバルナイフをぎらつかせながら、二度三度とそれを信長のほうに突き出し、信長を威嚇（いかく）した。だが、当の信長は、顔色を変えようとしなかった。まるではじめに見る珍しい動物を目の前にしたかのように、地崎の動きをまばたきもせずに、観察している。

落ち着き払った信長の様子に地崎が、あせったようだった。いきなり、ナイフを信長の方に突き出した。

「このやるつ」

その瞬間、信長は、左手でナイフを持っている方の地崎の腕の手首を握り、右手を地崎の腰に回したかと思うと、くるりと地崎の体全体をターンさせた。

1回。2回。そして3回。地崎のでかい体が、まるで見えない糸にあやつられるかのように、信長の細い体のまわりをくるくる回転した。そして最後には、勢いのついた地崎の体が壁に向かってぽんと放り出された。

どしーん。

衝撃音とともに、地崎の体が壁にぶつかり、その振動でしばらく壁全体がぶるぶる揺れ続けた。

「あー」

地崎は、しばらく手を鼻にあてて顔をうつむけていた。鼻の頭をしたたかに打ったようだった。

信長は、そんな地崎を横目でちらりと見ると、ゆっくり教室に戻ってきていた。息ひとつ乱れていない。

今あったことなど、気にも留めていないようだった。

1年の全員がその様子をあっけにと取られて見ていた。ややあつて、誰かが思いついたように拍手をした。それをきっかけにほかの教室のみんなもいっせいに拍手をし始めた。

「いいぞー、信長！」

「信長君！ かっこいいー」

「ぴーぴーぴー」

口笛を吹くものもいた。拍手がひととき大きくなった。

ようやく顔を上げた地崎が思わぬことの成り行きに、目を丸くしたまま突っ立っていた。

「帰れ、帰れ。3年、帰れ！」

「そっだ、そっだ。3年、帰れ」

その地崎たちに向かって、帰れコールの大合唱が始まった。

地崎は精一杯肩を怒らせ、みんなをおどしつけようとしたが、さすがにここまで大勢の人間を相手にしては、なすすべもなかった。

「帰れ、帰れ。3年、帰れ！」

帰れコールが、ますます大きくなった。

「ちえっ。お、覚えてるよ」

ややあつて、地崎が、捨てゼリフを吐いた。

「おらあ、何もたもたしてるんだ。帰るぞ」

地崎が、奥出たちをこづいた。

「やった、やったあ！」

地崎たちの姿が廊下から消えると、みんなが興奮して、口々に歓声をあげた。

「ばんざーい、ばんざーい。信長ばんざーい」

「やった、やったぞ。3年に勝ったぞ」

みんながお互いに肩を叩きあったり、抱き合ったりして喜びを分かち合った。そんな中を当の信長だけは、顔色も変えずに静かに席に戻っていった。

20

やがてみんなの興奮がおさまると、また数学の授業が始まった。ただし、今度は、先生も二度と信長を当てようとはしなかった。

3

信長は一気にクラスのヒーローになった。だが、それによって信長の日常が何か変わったわけではなかった。相変わらず、授業中は授業を聞いているのか聞いていないのかわからない。数学は相変わらずちんぷんかんぷんのもうだったし、英語にもさっぱり興味を示さなかった。

ところが、社会の時間の時のことだった。社会の奥村先生が、世界地図を黒板に張り出して、日本の世界における位置づけを解説した。

「みなさん、この大きな大陸がユーラシア大陸です。ユーラシアとは、ヨーロッパとアジアを合わせたことばなんです。だから、ヨーロッパとアジアが、この大陸に含まれますね。ドイツもフランスもロシアも中国もインドも全部この大陸にあります。だから世界最大なんです。これが、アフリカ大陸。世界で2番目に大きな大陸ですね。それからこれが北アメリカ大陸。もちろんアメリカやカナダがある大陸ですね、そしてその下が、南アメリカ大陸。いいかな、頭に入ったかな？」

奥村先生の説明が続いていた。浩一はいつものくせで、信長の方を見やった。

浩一は、信じられない光景に息を呑んだ。信長が、いつもと違い、身を乗り出して奥村先生の説明を聞いていた。目は世界地図を六の開くほど見つめ、先生の説明にひとつひとつ、こくりこくりとうなずいている。浩一は授業中

にここまで真剣になっている信長を見るのは、初めてだった。

「先生奥村。それで、日本はどこだ？」

信長が、かん高い声を出した。信長が先生に、質問するのも初めてのことだった。

「えっ、日本は、ほら、ここだったらろう？」

奥村先生が、ユーラシア大陸の端っこにある小さな島を指した。

その部分に、小さな三日月形をした日本がへばりついていていた。

「そんなに、小さいのが日本か！」

信長が小さくうめいた。そのことをはじめて知ったようだった。

奥村先生は、しばらく信長を見つめていたが、まもなく説明を続けた。

「そして、ここが中近東ですね。大部分は砂漠だけど、日本はこの地域からある重要なもののほとんどを輸入してるんだよね。何だか分かるかな？」

「知ってる、知ってる。石油だ」

数人が、そう答えた。

「そのとおりです。日本は石油のほとんどすべてを外国から輸入してるんだね。」

「何、ユニユウ？ ユニユウって何だ？」

また、信長が素っ頓狂（とんきょう）な声を上げた。

「輸入っていうのは、外国から日本に必要なものを買うことだったね。日本に必要なけど、日本にはないものを外国から買う。逆に日本は、日本で作った方がいいものを外国に売る。そうやって世界中の国同士が、お互いに取り引をしてるんだ。いいかな？ 分かったかな？」

奥村先生は、まるで小学生に教えるように、やさしく解説した。

信長は相変わらず、かっと目を見開いて世界地図の隅っこにある、日本を見つめていた。

その日から信長の猛勉強が始まった。

小学校の社会、理科の本をどこかから借りてきて読む。地理の本を図書

館から借りてきて読む。とにかく色々な本をむさぼるように読んでいた。
だった。

そして、信長はひまさえあれば、浩一に疑問をぶつけた。

「西江、島国というのはどういう意味だ？」

「えっ、島国？ そりゃあ、日本のようにまわりが全部、海で囲まれている
ような国のことだよ。」

「ほう。それならそんな国が、外国からのものをユニユウ出来なくなったら
どうなる？」

「それは、もちろん困るよ。それが原因で日本が戦争を始めたこともあるん
だよ。」

「なに？ 戦争？ いくさのことか？ それで、そのいくさはどうなった？」

「もちろん日本が負けたんだよ。60年も前のことだよ。」

「何、日本が負けた！ それで日本人は、どうしたんだ？ 全員、切腹でも
したのか？」

「ちがうよ。だから、ぼくたちがこうして生きているんじゃないか」

「なるほど、それもそうだな。西江、お前、頭がいいな」

「……………」

また、ある日、信長は唐突（とつとつ）に浩一に聞いた。

「西江、質問だ」

「うん、何だい？」

「なぜ日本は石油を自分で作れないんだ？」

「えっ、なぜかって？ いや、石油って言うのは、天然原料だからね。人間
が作るわけにはいかないんだよ。石油ってのは、もともとは大昔の生物の死
骸（しがい）が、土に埋まって、それから出来ているといわれているんだ」

「それなら、日本もその生物を土に埋めて、新しく石油を作ればいいじゃな
いか」

「いや、大昔と言うのは、百万年以上も前のことだからね。今から作ろうと

してもとても間に合わないんだよ」

「しかし、これを見る」

信長が持っていた本の1ページを指差した。

「最近、わずか3年で、石油の値段が、倍に上がっているじゃないか。日本が自分の石油を持たないから、言いなりになる以外にないってことじゃないか？」

「うん。そりゃ、そういうことだね。」

「それどころじゃないぞ。西江。こっちのページを見る。この年はわずか半年で石油の値段が4倍から5倍に上がっているじゃないか」

「えっ、そんなことがあったの？」

「何だ。そんなことも知らなかったのか？　それが石油ショックじゃないか。」

「……………」

さらに数日たったある日、信長は新しく図書館から借りてきた数冊の本を相変わらず熱心に読んでいた。日本のエネルギー事情、アラブ諸国の石油戦略。浩一が見たこともない難しい題名の本だった。

「西江、質問だ」

「ああ、何だい？」

「アザデガンの埋蔵量（まいぞつりょう）は本当に、300億バレルもあるのか？」

「えっ、アザデガン？　いや知らないよ。何だい、それ？」

「何だ。知らないのか？　アザデガン油田。イランの油田じゃないか」

「……………」

浩一は、啞然として信長を見つめた。いつのまにここまで勉強したんだろう？　もうそのころには、信長の知識はとっくに浩一が答えられるレベルを超えていた。

数日後、浩一の肩をとんとんとたたく者がいた。副委員長の東（あずま）なつきだった。二人は教室のものかげに行った。

「ねえ、西江君。ちょっと相談があるの」

東なつきが、人のよさそうな顔で切り出した。

「信長君がね、給食費を払ってないのよ」
「思わぬ内容だった。」

「それに、来月からは、修学旅行の積み立ても始まるでしょう。だから、私
どうしたらいいか、困ってしまっ

東なつきは、本当に困ったような表情を浮かべている。

「そんなことなら、先生に相談してみたらどうだい？」

浩一はあたりさわりのないことを言った。

「私もそう思ってね、担任の高木先生から信長君の家に電話してもらったの。
そうしたらね、耳の遠いおばあさんが一人いるだけで、さっぱり話が通じな
いって言うのよ」

「.....」

「西江君、信長君と仲いいんでしょう？ 私この前、二人で駅前のダンス教
室から出てくるのを見かけたの。だから、西江君なら信長君に事情を聞いて
もらえるかと思って。ほら、男同士でないと話できないようなこともあるで
しょう？」

なつきが、暗に信長の家の経済事情のことを指しているのが分かった。

たしかに信長はクラスの中で他に友達らしい友達もいない。気は進まないが
浩一ぐらいしか信長にそんな話が出る人間はいそもなかった。浩一はし
ぶしぶなつきの申し出を、承諾した。

昼休み、浩一は、腕をさすりながら学校のグラウンドの裏手にある高台に
いる信長に声をかけた。この高台は一年中風が強い。今は、春とはいっても
肌寒いぐらいだった。信長は一人で高台の斜面に腰をおろして黙々と、ひろ
った草を風に向けて飛ばしていた。

「やあ、信長君、何してるんだい？」

「おっ、西江か。いいところに来た。お前、腕時計持っているか？」

「うん、持っているよ」

「それを、ちよっと貸してくれ」

浩一が、腕にはめている高価なダイバーズウォッチを信長に渡すと、信長は斜面の下の方に行った。

「よし、そこから、草を飛ばせ」

浩一は言われるままに草をちぎって宙に飛ばした。

「いや、それじゃだめだ。もっと細かくちぎって飛ばせ。よし、今だ」

信長が時計を覗き込みながら合図をした。

「よし、もう一度だ」

そんなことが何度か続いた。

「よし、3秒だな。西江、お前のいるところからここまで、何メートルぐらいあるっ？」

信長が、そう言っって自分の立っているところを、かかとでとんとんと示した。

「うーん。まあ20メートルぐらいじゃない？」

「それで20割る3はいくらだ？」

「大体、6ちよっとだね」

「うん？ 風速6メートルちよっとだな。思ったとおりだ。」

信長は、そう言っつと斜面にどっかとお尻をおろした。相変わらず、二本の指で時々頭をたたきながら、考え事をしている。

ややあつて、信長は、よし、というかけ声とともに、突然斜面から立ち上がった。

「おれは、ちよっと行く所を思い出した。じゃあな」

信長は、あつという間に斜面を駆け下りていた。

そして信長は、その日から三日間、学校にまったく顔を見せなかった。

数日後、横川中学の校長である榎田（えのきだ）秀夫は、うきうきしながらネクタイを直していた。昨日突然、本省から連絡があつて、横川中学を日本で初めてのモデル校にしたいという打診（だしん）があつていた。

「21世紀資源循環（じゅんかん）型モデル校」だか何だか、担当者は長つたらしい名前を口にした。だが、榎田にとって、そんな中身などどうでもよかった。この学校が全国初のモデル校として名前が売れば、自然に榎田がマスコミに出る機会も増える。そうして有名になれば榎田自身が、将来はもっと大きな学校の校長に抜擢（ばつてき）されることも夢ではなかった。

現に今日も、その内容説明に国会議員をはじめ、関係者が榎田校長を訪ねてくることになっていた。俺も偉くなったもんだ。榎田は思わず、鼻歌を口ずさんだ。

玄関ホールの方から、数人の足音が近づいてくるのが聞こえた。その一行に間違いなかった。榎田はにこやかに一行を迎えた。ポスターでしか知らない国会議員を先頭に数人が校長室に入ってきて、それぞれ丁寧に名刺を差し出した。

「まあ、まあお座りください」

榎田は余裕の表情で来客用のソファを指し示した。

一行が腰をおろした。最初は他愛もない世間話が続いた。

やがて一人が本題を切り出した。さっきの名刺では「西日本電力社 副社長

本田 保（たもつ）」となつている男だった。

上品な白髪交じりの頭に銀縁（ぎんぶち）のめがねをかけていた。

「実は、ご承知のように今、わが国をめぐるエネルギー環境は大変にきびしいものがありまして……」

本田が額の汗をぬぐいながら、緊張した面持ちで説明をし始めた。

「何しろ日本は、エネルギーの94パーセントを石油、天然ガス、ウランなどの海外原料に頼っているのが現状です。」

したがって、当社としてもなるべく水力発電などの、国内自給体制に切り替えたのが長年の希望だったわけです。」

本田は、そこでいったんことを切り、細かいグラフや表が書き込まれた資料を榎田の前に並べた。

「ところが、水力発電はご承知のとおり、財政事情からしてこれ以上巨大ダムを作るわけにはいかないという状況がありまして……」

本田は、また額の汗をぬぐった。

「そこに、こちらの中学校の校長先生が、大変に深い理解を示していただきまして、風力発電に大変に適したこの中学校の高台を、風力発電用地として提供いただけるといふ話をいただいたんですから、こうやってさっそく大勢で押しかけたしだいでございます」

？ 風力発電？ 用地提供？ 何のことだ？

榎田の顔から笑みが消えた。悪い予感が榎田の心をよぎった。

「しかも、工事にあたりましては、こちらの中学のモデル授業の一環として、全校生徒、先生たちまで全面的に協力をいただけるといふお話は、本当に当方としてもありがたいかぎりでございます。まったくもって榎田校長先生のご理解には心より敬服しているしだいでございます」

榎田の頭に、ようやく事態が飲み込めてきた。要するに、彼らはこの横川中学の南にある高台に風力発電用の設備を作り、これからのモデル事業の前列にしたいらしい。

普通の用地の取得には莫大な資金と地主の説得がいる。ところがもしも、学校に遊んでいる用地があつて、それを発電用地として利用できれば、その両方が節約できる。そのことは榎田にもよく理解できた。

しかし、そんな馬鹿な！

そんなこと、生徒や先生たちを説得できるわけがない！

確かにこの横川中学校は高台に位置し、特に南側の広大な斜面は、今は遊んでいる。しかし、だからといって、それを発電用地にするなんてことを言い出したら、みんなが何と云うだろうか？ 榎田の頭にただでさえうるさい保

護者の面々の顔が浮かんだ。

しかし、どうしたことか、目の前にいる連中は、そのことが学校側の総意であると信じきっている。榎田に彼らを敵に回す度胸はなかった。ここは、彼らを怒らせないようにはやんわりと断らなくてはならなかった。

そのためには、何か断る理由を見つけなければ。どんな理由がいい？どんな理由がある？ 榎田は必死で頭を働かせた。

榎田は「ぐくりと生つばを飲んだ。

「いや、しかし、こちらは学校でございますので、法律上、そういう発電というような事業を営むことが出来ないと思うんですが？」

「ええ、それです。それを当方も心配していたわけですが、いや、榎田先生も人が悪い。だからこそ、学校は生徒の教育のために、用地を提供するだけとし、発電事業そのものは生徒が中心となった会社で運営するというのが、先生ご自身のアイディアじゃないですか。」

えっ、だれのアイディア？ おれのアイディア？ そんなこと考えたこともないぞ。

榎田は、何が何だかわけが分からなかった。

「生徒にすれば、それがそのまま社会勉強の一環になるという先生の、長期的な見地に立った考えに、私ももままったく感心させられました。そこで私ももここ数日、その案を検討させていただいたのですが、いやもう、まったくすばらしいアイディアで、これならまったく問題ないという結論に達しましたので、その報告もかねて本曰うかがったしだいでございます。」

本田がにこやかに言って、榎田の顔を見た。

「いや、私も自分の選挙区で、国のモデルとなるような事業が出来て鼻が高いですよ。」

国会議員も満面に笑みを浮かべてうなずいている。
何ということだ！

榎田は、自分の耳が信じられなかった。誰かが自分の名前をかたって、この案を彼らに吹き込んでいた。なるほど、話を聞くだけなら、すばらしい案か

もしれない。しかし、それを説得するとなると、その負担は自分にかかってくる。

榎田は混乱した頭をまとめるのに時間がほしかった。この年になって、やっぱり問題を抱えることだけは、避けたかった。

「えー、まあ、この件に関しては、私としましては、・・・」

そう榎田が言いかけた時だった。どやどやっと、大勢の人間が校長室になだれこんできた。

ぱっ、ぱっ。

榎田の周りにカメラマンが殺到し、フラッシュがさかんにたかれた。

「毎朝新聞ですが、今回、日本で初めての画期的なモデル校指定に選ばれた感想を、ひとことよろしいですか？」

「YTTテレビですが、今日の夕方のニュースに向けてコメントをひとことお願いできませんか？」

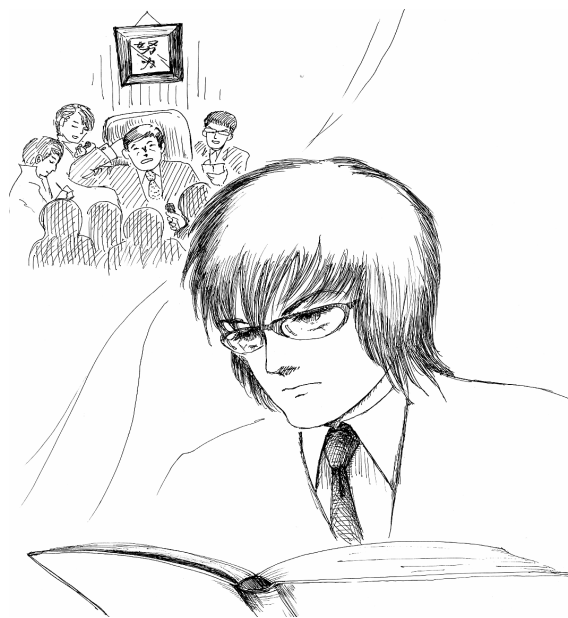
誰かが、手回しよく、今日の会見のニュースを報道陣に流していたようだった。ここまでくれば、しょうがない。榎田としても腹を決める以外になかった。そうなれば榎田は抜け目なかった。

「ええ、ええ。私としては、以前から将来の日本のエネルギー問題を子供たちに自覚を持ってもらうためにも、教育に携（たずさ）わるものとして、何かお手伝いが出ないかと、思っていたわけですが・・・」

榎田のなめらかなスピーチが続いた。

こんなことなら、この前買ったばかりのエルメスのネクタイを締めておけばよかった。

榎田は心のうちでは、そのことを後悔していた。



やがて報道陣が去った後、本田がもう一度口を開いた。

「いや、順調なスタートが切れて、大変よかったです。ところで校長先生、この前私どもの会社に来た北小路君は、すばらしい生徒ですね」

「えっ、きたこっじ？」

「ええ、あの北小路信長君ですよ。校長先生の代理で来た・・・」

「あ、ああ、北小路君ね。はい、はい。ああ、もちろんですよ」

「それにしても、あの信長君は、中学生ながらしっかりしていますね。日本のエネルギー事情から、政策のあるべき姿まで、何でも知っています。とても中学生とは思えませんね。やっぱり校長先生がじきじきに教育されるからでしょうね」

「いや、まあ、そこまでもないですがね。いや、おほめいただいて恐縮です」

榎田は、あわてて話を合わせた。どうやら、その信長という子が、風力発電のアイディアを電力会社に売り込んだ張本人らしい。そして、それを校長である榎田のアイディアだと言っているらしい。榎田はそのことに気をよくした。まあ、結果よければ、すべてよしだ。ここは、話を合わせておく方が無難だろう。榎田はめまぐるしく計算を働かせた。

しばらくして、訪問者の一行は、時計を見て腰を浮かし始めた。

「びっも、今日は貴重な時間をいただきました。ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそありがとうございました」

榎田は、相変わらずにこやかな表情を保ちながら、一行を玄関ホールまで見送った。本田が何度も丁寧にお辞儀をした後、別れ際に思いついたように言った。

「それで、生徒が運営する会社の方ですが、あとは信長君と、打ち合わせを進めてよろしいでしょうか？」

「えっ、ええ、ええ。信長君ですね。ええ、もちろんですよ。もちろん結構ですよ。生徒がこついうことを通じて社会のことを学ぶ、というのがこのプロジェクトの趣旨ですからね」

榎田は、胸を張って答えた。

だが、榎田は内心ではまったく別のことを考えていた。

北小路信長って一体だれだろう？

校長室を出た西日本電力社副社長の本田たち一行は、そのまま1年3組の教室にやってきた。そして、休み時間になるのを待ちかねたように、信長の席に近づいてきた。信長の顔を見知っていた本田が、信長に何事か話しかけていた。その本田に対して、信長は、短くうなずくと、しばらく何か考えていたようだったが、やがて浩一の方をあごで示した。本田たちが今度は、浩一の方に近づいてきて丁寧にあいさつを始めた。

「いや、このたびは、私どもと共同で設立する会社の社長になっていただいて、まことにありがとうございます」

「国会議員の原田です。西江社長さん、今後ともよろしく願います」
一行は次々に名刺を差し出して、浩一にうやうやしく初対面のあいさつをした。浩一はどきまぎして、あいさつを返した。こんな立派な大人に深々と頭を下げられるなんて初めてのことだった。

浩一は、何がどうなっているのかさっぱり分からなかった。

「信長君。一体何がどうなっているんだい？ ぼくが社長って何のことだ
い？」

一行が帰っていった後、浩一は、狐につままれたような面持ちで信長に聞いた。

「ああ、今度新しく作る会社には、社長がいるからな。お前がなるように言っただ」

信長が無雑作に答えた。

「えっ。ぼくが社長？ そんなの聞いてないよ。」

「そつだろうな。今決めたからな」

信長は相変わらずそっけない。

「でも、僕なんかで社長が務まるだろうか？」

「そりゃ、いいだろう。お前、数学が得意だからな」

それだけ言うと、信長は何事もなかったかのようにまた二本の指でとんとんと頭を叩き始めた。目は宙の一点を見つめている。また何か、考え事を始めたようだった。

5

次の日から横川中学の名前は一気に有名になった。そして学校は色んな訪問者でこった返した。新聞記者、テレビ局、役所、電力会社、他の学校からの視察。校長の榎田は、インタビューや講演などに引っ張りだこになり、それこそ席の暖まる暇もなかった。

そして、それは思いもかけず新会社サザンウインドの社長になった浩一にとっても同じことだった。浩一は本田から手渡された分厚い資料に徹夜で目を通した。

資本金。事業内容。・・・

いろいろな専門用語に続けて複雑な数字が次々に並んでいた。浩一は会社で經理をしている父親の本棚から会計辞典を引っ張り出して、必死になってその中身を勉強していった。

やがて、ひとつの言葉が浩一の興味を引いた。

用地借り入れ代金

どうやら、新しい会社が学校から借りる発電用地に対してお金を支払うことになっていくらしい。浩一はその横に並んでいる金額に目をやった。そこには信じられないような大金が表示されていた。そうしてそれに続いて支払い先が明記されている。

支払い先 サザンウインド社長 西江浩一。

えっ、俺に？

浩一はあまりのことに目を疑った。そういえば、その後ちよくちよく浩一を訪ねてくるようになった本田が、浩一のために大人が持っているような実印を作ってくれ、さらには浩一名義の銀行口座を開いてくれたことを浩一は思い出した。そのこととこれが何か関係あるのだろうか？

そう思うと浩一は、いても立ってもいられなくなって、さっそく銀行に行った。そして窓口の女性に、浩一名義の通帳を差し出した。

やがて、名前を呼ばれた浩一が通帳を受け取って、それを恐る恐る開くと、そこには計画書にあったとおりの金額が記帳されていた。

こんな見たこともない大金。どうしたらいいんだ？

通帳を持った浩一の手がいつの間にか細かく震えていた。

翌日の昼休み。浩一は信長の姿を求めて、南の高台に行った。思ったとおり信長はそこに一人で腰をおろしていた。時々草をちぎっては風に乘せて飛ばしている。

ここの高台は相変わらず風が強い。風速平均7・2メートル。浩一は西日本電力社の技術スタッフによる、正確な風速測定結果のレポートを思い出していた。この周辺では風力発電には理想的な環境だった。信長と二人で原始的なやり方で風速を測定したのは、わずか数週間前のことだった。それが今でははるかに遠い昔のことのように思えた。

浩一は、信長の横に腰をおろした。

「ああ、西江か」

信長はいつものとおり表情も変えない。

「もうすぐ工事が始まるね」

「うん？ ああ、今度の会社のことか」

「うん。色んな準備で目が回るほど忙しいんだよ。本田さんたちは寝る暇もないってぼやいているよ」

「ああ、そうか」

「それとね、会社の名前は、サザンウインドに決まったよ。サザンは英語で南、ウインドは風って意味だからね。ここの名前から取ったんだ。」

「そうか。バテレンの名前か」

信長は、それほど興味もなさそうに言った。

しばらくして西江は本題に入った。

例の口座に振り込まれていた大金のことだった。

「それで、何が問題なんだ？」

信長はげんなりした表情を浮かべていた。

「いや、さっきも言ったように余りにも大金だから、どうすればいいかと思つて」

「お前の小遣いにすればいいじゃないか」

信長はあくまでも素っ気ない。

浩一は啞然として信長の顔を見つめた。十円や百円の金ならまだしも、話題にしているのは普通の人間が一生かかっても使い切れないような大金だ。

それを信長は、平然と小遣いにしろと言っている。正気の沙汰とは思えなかった。

「いや、そんな程度の金じゃないんだよ、信長君。分かる？ この金額はね、ものすごい大金なんだよ」

「ああ、そうか。お前だけでは使い切れないのか。それならみんなが使えばいいじゃないか」

信長は、それだけ言うと、もう興味をなくしたかのように遠くの方を見つ

めていた。

なるほど、みんなが使えばいいわけか。

浩一は、その信長のことは目からうろこが落ちる思いだった。

みんなが喜ぶようなことに使つ。それならば何とかなる。しかし……。

浩一は、そこで頭をかしげた。みんなが喜ぶようなことって何だろう？

みんなは、どんなことに困っているだろう？ 浩一は目の前の信長を見た。

たとえば、この信長はどんなことに困っているのだろう？ どう考えてもこの浮世離れのした信長が困っていることなんて、ありそうになかった。

あつ。

その時、ひとつだけ、浩一の頭にひらめくものがあった。

翌週から、いよいよ南の高台の工事が始まった。ただ、この工事に集まった人たちの顔触れは一風変わっていた。一見してプロと分かる工事現場の作業服を着た人に混じって、どう見ても普通の女性や男の人が大勢いた。

その男女が、談笑しながらきびきびとプロの指揮下に入り、作業に参加する様子は、まるで何かのお祭りの準備をしているような明るい雰囲気満ちていた。

「おや、村岡さん。今日は仕事はお休みですか？」

「ええ、3日間だけ、休みを取ってきましたよ。何しろ、娘の学校がやるプロジェクトですからね。協力しなければしょうがありませんよ」

「あら久しぶりだね、あきえさん。あなた今、秋田に住んでるんじゃないの？」
「ええ、そうですよ。でもね、私の母校で全国でも初めてのことをやるっていうじゃない。それでボランティアを募集しているって聞いてね。募参りがてら飛んできたのよ。それにしても、この高台なつかしいわ。昔、演劇部でこの高台に登って大声で発声練習したものだわ」

あつちでもこつちでも、そういうにぎやかな声が飛び交っていた。みんな浩一が発案したボランティア募集に応じた保護者や、卒業生の面々だった。

給料なし。ジューズもなし。重労働。

ただし、みなさんの名前が永遠に残ります

浩一が、二日間考え抜いたボランティア募集のコピーだった。それに東なつきが、得意な絵を添えた。浩一は学校中に呼びかけ、そのポスターを町中の至るところに張り出し、さらに学校の卒業生全員に送った。もともとテレビのニュースや新聞などでこのプロジェクトに関心を持っていた人たちからどんどん協力の申し出が寄せられた。ジューズもないと聞いた人たちからは飲み物や、差し入れが山のように届いた。そのことがまたマスコミの関心を呼び、さらにニュースなどで取り上げられた。

もちろん一方では、みんなこのプロジェクトによって自分たちの子供や甥や孫たちが恩恵を受けることを知っていた。

「それにしても、今度から給食費も修学旅行の積み立ても、いっさいなくなるって聞いた？ 助かるわよねえ」

「ほんと、ほんと。本当に助かるわ。西江君って子。本当にいいことをしてくれるわね。」

「本当よね。私も最初は中学生が社長になるなんて信じられなかったけど、さすがに若い分、思い切ったことしてくれるわねえ。大助かりだわ。こんなボランティアならいつだって協力するわ」

「本当よねえ」

保護者たちはそう言って、また笑顔で割り当てられた作業に戻っていった。

「ここまでみんなが喜んでやる仕事が、うまくいかないはずがない。工事は予定されていた期間を大幅に下回り、わずか1ヶ月で完了した。」

工事が完成して数日後、浩一は信長と二人で高台の斜面に腰をおろしていた。二人の頭上では何十基もある巨大なプロペラが風に吹かれて、ゆっくりその羽根を回していた。その羽根の動きは緩慢で、おとぎ話の世界のようだ

ったが、そのローターと呼ばれる中心部では、今この瞬間にも、ものすごい量の発電が起きていることを二人とも知っていた。

風力発電の仕組み自体は簡単だった。ブレードと呼ばれる直径50メートルもある巨大なプロペラをローターに取り付け、それが風を受けて回る。

それがローターの中央にある増速機によって回転が速められ、最終的には発電機で集中発電をする。そうやって得られた電気は、電力会社を通じて一般の家庭や工場に売られることになっていた。何しろ自然に吹く風を利用するわけだから、いったんこの風車のお化けを建ててしまえば、それ以後のコストはほぼ、無料(ただ)だ。こんなうまい話はなかった。

前日の夜、浩一は本田から届けられたサザンウインド社の報告書を読んでいた。完成された風力タワーの実験と試運転が完了すると、いよいよ実際の売電が始まる。その売電の量は横川町全体の電力の半分をまかなえるぐらいの規模に達していた。

そして、そのことは来月からサザンウインド社に、毎月収入が入ってくることを意味する。報告書は、今年度に関する売り上げの見通しと利益の予想に関するものだった。その見通しを見て、当初の計画とのあまりの食い違いに、浩一は思わず自分の目を疑った。

当初の計画では、最初の10年間ぐらいは、ある程度の赤字が出るのが予想されていた。この種の開発プロジェクトでは、そのぐらいの赤字が出ることは常識になっていた。いくら完成した後のコストが無料(ただ)だと言っても、最初の建設費に巨額の費用がかかるからだ。

ところが、今回はボランティア動員で工事の大部分をまかされたため、その費用が大幅に節約されていた。したがって、これまでの常識を大きくくつがえして、どう計算しても最初の年から巨額の利益が出る見通しになっていた。本田の報告書ではボランティア動員を発案した西江社長の経営手腕と着眼点の良さをほめちぎってあった。

そのことを浩一はさつきから信長に話していた。

「うん、何だ？ 要するに何が問題なんだ？」

相変わらず信長は二本の指で頭をとんとんと叩きながら、まるでよその世界の話を書くような感じで浩一に問い返した。

「いや、だから普通なら、10年ぐらいかかって赤字が解消されれば十分なんだ。それで、何かもつといい方法がないのかなと思ってるんだ」

「何だ。金が余って困るのか。それなら簡単だ。お前の小遣いに使えばいいじゃないか。お前、何か買いたいものはないのか？」

「そりゃあるよ。ラジコンカーを前から買ったかったんだ。」

「それなら、それを買えばいいじゃないか」

浩一は、まじまじと信長を見つめた。

「でもね、信長君。今言っているお金はそれどころじゃないんだ。ラジコンカーを作っている会社をまるごと買えるようなお金なんだよ」

「ほう。それで、そのラジラジ何とかってのは、どんなものなんだ？」

「ラジコンカーってのはね。遠くから無線で操作して動くプラモデルの車なんだ。遠くから右や左にコントロールするのって、結構面白いんだよ。マニアになるとね、それで複雑なコースを作って大会をやったりするんだ」

「それでそのラジラジ何とかは、車だけのことなのか？」

「いや、違つよ。もちろん戦車なんかもあるし、もっとマニアになるとヘリコプターや飛行機まで操縦したりするんだ」

「何？ 戦車や飛行機？」

信長が突然、浩一の方に身を乗り出した。目をらんらんと輝かせている。

「西江。それだ！ そのラジラジ会社をまるごと買え」

「えっ、そんなことして、どつするんだい？」

「分かりきったことだ。その会社を買って、お前がその社長になるんだ」
「.....」

浩一は、しばらくの間、言うことばが見当たらなかった。

つづく。